OUKA
The University of Osaka
Institutional Knowledge Archive

Title	大型計算機センターからサイバーメディアセンターへの発展的整備
Author(s)	白川, 功
Citation	大阪大学大型計算機センターニュース. 2000, 114, p. 1-2
Version Type	VoR
URL	https://hdl.handle.net/11094/66360
rights	
Note	

The University of Osaka Institutional Knowledge Archive : OUKA

https://ir.library.osaka-u.ac.jp/

The University of Osaka

巻頭言

大型計算機センターからサイバーメディアセンターへの発展的整備

大阪大学大型計算機センター長　白 川 功

平成10年度から足掛け2年、センターが一丸となって設置準備を進めてきましたサイバーメディアセンターが平成 12 年度に設置されることとなりました。ここに、昭和44年(1969年)4月に発足した大型計算機センターが、奇しくも、西暦2000年という記念すべき年に、しかも満30歳を迎えたという2重の良き節目に、発展的に廃止され、新しい大組織として再出発することになったわけであります。

筆者は、平成10年4月以来、本センター長を仰せつかっておりますが、今回のこの本センターニュースへの寄稿が、実は、初めてでしかも最後の機会になることと相成りました。そこで、これを機に、本センターの沿革を振り返って見ようとしますと、実に懐かしい数々の過去の出来事が思い出されます。

本センターの主要計算機は、昭和40年代初頭から50年代初頭にかけての10年間は、NEAC2200シリーズ(モデル200、500、700)であり、さらに、それに引き継いで昭和60年代初頭までの10年間は、ACOSシステム(モデル700、800、900, 1000)でありましたが、これらの計算機の品番を目にしますと、筆者にとりましては、まず個々にまつわる懐かしい特別の思い出が走馬灯のように駆け巡ります。

当時は、筆者等は、研究室をあげて、電子回路、プリント基板、あるいは大規模集積回路の計算機援用設計に関する研究に従事しておりましたので、研究の大半は算法あるいはアルゴリズムの開発およびその評価のための大量の大規模計算であり、しかもその作業のすべてをこれらの計算機の性能に頼っておりました。当時まだ学生で、いまや会社の重役、部長、エンジニア、あるいは大学教授となっている人達が、研究室でどんなテーマで何を研究していたかについては、論文の実験結果の項の末尾に記した使用計算機の品番が鮮明に思い起こしてくれるため、当時の研究室風景と人物像が実に懐かしく思い出される、というわけであります。

さて、昭和50年代に始まったコンピュータのダウンサイズ化は、昭和60年代に入ると、上記大型計算機の守備範囲をワークステーションのそれで置き換えることとなり、さらには、大規模システムシミュレーションに特化して発明されたベクトル計算用のスーパーコンピュータが新たに登場し、本センターにおいても大型計算機に代わる貴重な実用的武器として導入されることとなりました。それに平行して、躍進を続けるイ

ンターネット技術は、本学においては一万数千の端末を有する世界に冠たる超大規模ネットワークODINSの構築を促し、これに基いた本格的な情報ネットワークサービスが開始されることとなり、本センターの業務が完全に一新し、まさに情報化社会の先導的役割を果たすこととなりました。

しかしながら、情報技術(IT)の真価が問われる21世紀において、情報を加工・蓄積する媒体となり、さらには、情報を処理・発信する教育研究の基盤となるような中核的拠点の形成が期せずして全学的に要請されるに至り、本センター、情報処理教育センター、および図書館の一部を再構成し、次世代の IT の教育研究を行なう拠点としてのサイバーメディアセンターの設立が構想されることとなりました。幸いにも、理学研究科、工学研究科、基礎工学研究科、言語文化部・言語文化研究科をはじめとする学内の教育研究組織、さらには、本部および本センターと図書館の事務組織からの絶大なるご支援およびご尽力により、7研究部門という驚異的な内容を包含したサイバーメディアセンターの設立の成就を見たわけであり、誠にご同慶の至りというところであります。

ここに記しまして、本センターの設立以来の運営と拡大にご尽力頂きました元センター長、元教職員、および現教職員、さらには、サイバーメディアセンター設立にご尽力頂いた教職員の方々から賜りましたご厚情およびご支援に対しまして、深甚の謝意と敬意を表する次第であります。

今後、この新しいサイバーメディアセンターを基盤として、本学の IT の教育研究のさらなる充実と進展を祈念するところであります。